

したがって、Qを含まない同格構造の場合と同様、①の「三冊」は後置できない、すなわち、②は③の「三冊」が後置されたもの、とみるべきであろう。このように考えれば、④についての直観も説明できる。なお、⑤はノ句の形になれば後置できる。

⑥ チョムスキーが来日したよ、有名な言語学者の。

<注3> Harada (1976) では、QFは表層の主語からだけでなく、“cyclic subject”——つまり、ある文を生成する過程の中のあるサイクルの終りにおいて主語だったNP——からも可能であるとしている。

<注4> (30)(31)について語順をいれかえると、次のように等位構造と同形になる。

① a 兵士とゲリラが戦っているよ、
四五人。

b 女性と男性が踊ったよ、三人。

これは、それぞれ、「兵士とゲリラ」が合わせて四五人、「女性と男性」が合わせて三人と解釈する。興味深い現象だが、議論の本筋からはずれるので、ここでは扱わない。

<注5> この文が不自然なのは、もとなる正置文

① ?男の子が三人女の子を四人いじめているよ。

がすわりの悪い文であるためだろう。このように同じ文の中でQFが二回起こると不自然な文が生じるようである。

<注6> この文は「六人の男の子」のうち「五人」

をいじめたという意味(奥津(1983)のいう「部分数量」)であれば適格である。

<注7> この文も「三人の若者のうち二人がほれた」という部分数量の意味を表す文としては適格である。

参考文献

- 井上和子1978 『日本語の文法規則』大修館
 奥津敬一郎1969 「数量的表現の文法」『日本語教育』14
 —————1974 「生成日本文法論」大修館
 —————1978 「『ボクハ ウナギダ』の文法——ダ
 とノ——」くろしお出版
 —————1983 「数量詞移動再論」『人文学報』№160
 東京都立大学人文学部
 Kamio, A.1973 “Observations on Japanese Quantifiers” Decriptive and Applied Linguistics vol.6 ICU pp.69~92
 神尾昭雄1977 「数量詞のシンタククス」『言語』6:8
 pp.83~91
 久野暁1978 『談話の文法』大修館
 柴谷方良1978 『日本語の分析』大修館
 Tomoda, S.1982 “Analysis of quantifiers in Japanese” Coyote Papers vol.3 University of Arizona pp.145~160
 Harada, S. I.1976 “Quantifier Float as a Relational Rule” Metropolitan Linguistics 1 pp.44~49
 松下大三郎1928 『改撰標準日本文法』中文館(覆刻(1974) 勉誠社)
 (東京都立大学大学院学生)

文章における意味の接続

平澤 洋 一

1. 文接続の方法

文章には、さまざまな「意味」が集まっている。文章は、数多くの語句、文、段落といった接続対象の集合であり、それらの有する「意味」の集合体とみることができる。従って、文章の「意味」の総体を把握するには、すべての接続対象に関する接続の方向と接続の方法を扱えばよい。

接続の方向としては、順接、逆接、並列、添加、選択、転換、補足、まとめ、比較、例示、同内容、対立、連想などがある。同内容型には、指示語型、代名詞型、同一語型、文反復型、類概念型、代入型などを考慮する必要があるようだ。この同内容型というのは、接続する対象の前項の「意味」と同一またはきわめてそれに近いものを後項が受ける形で接続していく場合をい

う。これに対し、対立型というのは、前項の「意味」と対立するものを後項が受ける形で接続していく場合をいい、同一語型、対立語型、文対立型などの接続方向がある。

接続方法というのは、相原林司氏の『文章表現の基礎的研究』によれば「どのような種類の言葉を用いて前項と後項をつなぐか、ということ」であり、氏は接続詞による接続、指示語による接続、名辞による接続（先行する文に用いられた、ある一定の語句を後続の文にも反復使用して、その間の意味的つながりを明らかにする方法）、連用形による接続や内容による接続を挙げている。

接続方法とは、いかなる性格のことばを使って前項と後項を接続するかというつながり方であるから、「文法的意味」が重視されるとみなければならない。相原氏の指摘されたほかにも、いろいろな接続の方法が観察される。形容動詞連語型、代名詞型、副助詞型、連体修飾型、あるいは、つなぎことばの明示されない潜在型としての名詞型や同一文型などが、それである。一例を示そう。

2. 句点文の接続

語と語の接続か、単位文と単位文の接続か、句点文（句点をもつ文）と句点文の接続かなど、接続対象によって接続方向と接続方法が大きく違ってくるので、ここでは句点文の接続のみを問題にすることにする。引用本文は二葉亭四迷『浮雲』（日本近代文学大系4、角川書店）である。ただし、一部表記を変えたほか、文番号を（）で、段落番号を〔〕で示した。

〔1〕(1)千早振る神無月も最早跡二日の餘波となつた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、遠渡る蟻、散る蜘蛛の子とうようよぞよぞよ沸出で、来るのは、孰れも顛を気にし給ふ方々。(2)しかし熟々見て篇と点検すると、是れにも種々種類のあるもので、まつ髭から書立てれば、口髭、頬髭、顛の鬚、暴に興起した掌破髭に、狎の口めいた比斯馬克髭、そのほか矮鶏髭、貉髭、ありやなしやの幻の髭と、濃くも淡くもいろいろに生分る。(3)髭に続いて差ひのあるのは服飾。(4)白木屋仕込みの黒物づくめには仏蘭西皮の靴の配偶はありうち、之を召す方様の鼻毛は延びて蜻蛉も釣るべしといふ。(5)是れより降つては、背皷よると枕詞の付く「スコッチ」の背広にゴリゴリするほどの牛の毛皮靴、そこで踵にお飾を絶さぬ所から泥に尾を曳く亀甲洋袴、いづれも釣しんぼうの苦患を今に脱せぬ貌付、デも持主は得意な

もので、髭あり服あり我また髪をか覚めんと済した顔色で、火をくれた木頭と反身ツてお帰り遊ばす、イヤお羨しいことだ。(6)其後より続いてお出でなさるは孰れも胡麻塩頭、弓と曲げて張の弱い腰に無残や空弁当を振垂げてヨタヨタものでお帰りなさる。(7)さては老朽しても流石はまだ職に堪へるものか、しかし日本服でも勤められるお身の上、さりとほまたお気の毒な。

(1)と(2)を接続しているのは「しかし」と「是れ」である。「しかし」は、接続方向が逆接型、接続方法が接続詞・接続詞的連語型の接続、「是れ」は接続方向が同内容型の中の指示語型、接続方法が代名詞型の接続である。(2)と(3)の接続語は「髭」で、これは方向が同内容型の同一語型、方法が名詞・名詞的連語型である。「しかし」や「是れ」が明示型の接続語であるのに対し、「髭」は潜在型のそれということになる。

(4)の文の重要語句は「黒物づくめ」と「仏蘭西皮の靴」と「鼻毛」の三つ、いずれも前文(3)の「服飾」を受けている。このような接続方向を類概念型と呼んでおきたい。接続方法は名詞・名詞的連語型である。「黒物づくめ」は、明治10年9月の太政官達第65号「官吏通常礼服ニ換用ノ服制」の規定「勅委任官大礼服ノ儀上下衣袴トモ黒羅紗地金飾章ノ大礼服着用可致事」「官吏通常礼服着用ノ場合ハ黒若シクハ紺色ノ上服（英語フロックコート）ヲ以テ換用スルヲ得ヘシ」によって流行した服装。「白木屋仕込み」とある白木屋の洋服部の開業は明治19年10月のことである。

(4)の「方様」は(1)の「方々」の類概念型、「鼻毛」は(3)の「髭」を受ける連想型の接続である。(5)の「是れ」は、この「鼻毛」を受けているのではなく、「方様」つまり、白木屋仕込みの黒物づくめに仏蘭西皮の靴という最先端の身なりをした官吏を受けている接続語。「是れより降つては」は、この人達より格が一段落ちると、の意であるから、接続方向は「まして、ことに、それより、そのかわり」ほど明確ではないにせよ比較型の機能を有しているとみるべきだろう。このほか(5)には、対立語型の接続もみられる。(4)の白木屋仕込みの黒物づくめと仏蘭西皮の靴に対し、(5)の背皷のよったスコッチの背広・旧式の亀甲洋袴に安物の牛毛皮靴は、文章論上の対立関係をもつ。(4)の「方様」と(5)の「持主」も同様であり、ともに接続方向は対立型の中の対立語型、接続方法は名詞・名詞的連語型である。

(6)は「其」が指示語型、「胡麻塩頭」や「空弁当を振垂げて」といった語句は(3)の「服飾」を受ける類概念型の接続とみてよいだろう。それを「日本服」で受ける

(7)も同型ということになる。と同時に、「日本服でも勤められるお身の上」とは太政官達第65号但し書きで認められた「羽織袴」をもって背広の代用とした「判任」以下の軽い官職の者のことであるから、(4)の「方襟」や(5)の「持主」を受ける比較型・対立型の接続にも関わっている。

(3)は単一の接続であったが、(2)、(4)、(6)は2重、(5)と(7)は3重の接続構造を有しており、句点までの長さが長くなったり文構造が複雑になったりすると一般に多重構造になりやすいようである。

〔2〕(8)途上人影の稀れに成つた頃、同じ見附の内より商人の少年が話しながら出て参つた。(9)一人は年齢二十二三の男、顔色は蒼味七分に土気三分、どうも宜敷ないが、秀た眉に儼然とした眼付で、ズーと押徹つた鼻筋、唯惜哉口元が些と尋常でないばかり。(10)しかし締はよささうゆゑ、絵草紙屋の前に立つても、パツクリ開くなど、いふ氣遣ひは有るまいか。(11)兎に角顔が尖つて頬骨が露れ、非道く癩れてゐる故か顔の造作がとげとげしてゐて、愛嬌氣といつたら微塵もなし。(12)醜くはないが何処ともなくケンがある。(13)背はスラリとしてゐるばかりで左而巳高いといふ程でもないが、瘦肉ゆゑ、半鐘なんとやらといふ人聞の悪い渾名に縁が有りさうで、年数物ながら摺疊皺の存じた霜降り「スコッチ」の服を身に纏つて、組紐を盤帯にした帽檐広な黒羅紗の帽子を戴いてゐる、今一人は、前の男より二ツ三ツ兄らしく、中肉中背で色白の丸顔、口元の尋常な所から眼付のパツクリとした所は仲々の好男子ながら、顔立がひねてこせこせしてゐるので、何となく品格のない男。(14)黒羅紗の半「フロックコート」に同じ色の「チョッキ」、洋袴は何か乙な縞羅紗で、リウとした衣裳附、緑の巻上ツた釜底型の黒の帽子を眉深に冠り、左の手を隠袋へ差入れ、右の手で細々とした杖を玩物にしながら、高い男に向ひ、

第二段落(8)は「みち」の意の「途」および場所を示す「見附の内」が(1)のそれを受けているから、同内容型のうちの同一語型。このほかにもう一つの接続がみられる。「少年」がそれで、これは第一段落(1)の「方々」を受ける同内容型の中の類概念型である。(9)も類概念型であって、接続文は前文の「兩人」を受ける「一人」ということになる。もちろん潜在型の接続である。また、「顔色」「眉」「眼付」「鼻筋」および「口元」に関する描写は、(1)の「顔」や(2)の「髭」などからの連想型の接続によるものである。「口元」は(10)にも意味的には受け継がれるが、同一語型のゼロ表記になってい

る。この一方、(10)は逆接の「しかし」による明示型の接続構造をもっている。

(11)の「顔」「頬骨」「顔(の造作)」は、(9)の文の人体の部分称を受けた連想形の接続表現とみることができよう。(12)の「ケン」は「顔」に「略されての表現であるから、(10)でみたような同一語型のゼロ表記のケースである。

(13)の文は、これまでの文とは異なった接続構造を内包しているようである。(13)はセンテンスが長いうえ、前半が「少年」のうちの背の高い男の描写、後半が「今一人」の男の描写になっていて、二つの描写部分を連用形という接続方法で接続しているからである。「背」は(11)の「顔(の造作)」を受けた連想型、「服」や「帽子」は(3)の「服飾」を受けた類概念型である。「少年」の被っている帽子は当時流行の黒羅紗製だからいいとして、スコッチの服、それも「摺疊皺の存じた霜降り」のスコッチときては、明らかに時代遅れの二級品である。この「スコッチ」は(5)を受けた同一語型であるとともに、(4)の「黒物づくめ」を受けた比較型の接続表現でもある。次に、(13)後半の「今一人」は(8)の「兩人」を受けた類概念型、「中肉中背」「丸顔」「口元の尋常な所」「眼付のパツクリした所」は、前文の「背」に対する連想型であるのみならず、「前の男」に対する比較型・対立型でもある。「色白」も(9)の「蒼味七分に土気三分」を受けた対立型である。

(14)はどうか。この文は引用末尾の「高い男に向ひ」のあとは会話文が始まり、その後にも(14)の文末を締めくくる述語はない。従って「高い男に向ひ」の後にはゼロ表記の述語として扱うことにする。(14)の「黒羅紗」は前文の同一語を受けたというよりも、帽子の修飾語に過ぎないとみるべきだが、黒羅紗であることは、この男の「服飾」の面での意味接続を問題にする場合には、意味をもってくる。つまり、黒羅紗の半フロックコートに同色のチョッキ、乙な縞羅紗のズボン、緑の巻上がった釜底型の黒の帽子、それに細杖とくれば、明治20年頃の紳士のトップ・モードであるばかりでなく、(3)の「服飾」や(4)の「黒物づくめ」を受けた類概念型、(13)の背の高い男の二級品の「スコッチ」を受けた比較型・対立型の接続に関与しているのである。

このように、第二段落の文は第一段落のそれに比べると、接続構造がいくぶん複雑になっており、ことに(13)では、センテンスが長いこともあって、5重の接続構造になっている。実際の文章は句点文接続だけではないから、語と語の意味接続、文と文、段落と段落の意味接続、シーンとサマリーの接続、修辭の意味と日常的意味の接続というように、何重もの接続が行われ、

しかも線条性という根本的な制約下で文脈は流れていくのである。

3. 会話文の接続

「(15)しかしネー、若し果して課長が我輩を信用してゐるなら、蓋し已むを得ざるに出でたんだ。(16)何故と言つて見給へ、局員四十有余名と言やア大層のやうだけれども、皆腰の曲ツた老爺に非ざれば気の利かない奴ばかりだらう。(17)其内で、かう言やア可笑しい様だけれども、若手でサ、原書も些たア嚙つてゐてサ、而して事務を取らせて扱の往く者と言つたら、マア我輩二三人だ。(18)だから若し果して信用してゐるのなら、已を得ないのサ」

「(19)けれども山口を見給へ、事務を取らせたら彼の男程扱の往く者はあるまいけれども、矢張免を食つたぢやアないか」

「(20)彼奴はいかん、彼奴は馬鹿だからいかん。」

「(21)何故。」

「(22)何故と言つて、彼奴は馬鹿だ、課長に向つて此間のやうな事を言ふ所を見りやア、彌馬鹿だ。」

「(23)あれは全体課長が悪いさ、自分か不條理な事を言付けながら、何にもあんなに頭ごなしにいふこともない。」

上記は、いずれも会話の文である。地の文と比べ何か接続方法に差がみられるであろうか。(15)の「しかし」からみていくことにする。引用部分は「浮雲」の冒頭部であつて(15)より前に会話文は存在しないものの、「しかし」は逆接の接続語として(15)以前の二人の男の会話の末尾文を受けるわけだから、作品構成論上の省略法が使われたものと解し、文接続レベルの意味論上は逆接の接続として扱うのが妥当と思われる。それに、(15)には他に接続語らしいものも見当らない。

(16)は「何故と言つて」による接続とみてよいだろう。この部分は接続機能としては「なぜなら」にきわめて近い。従つて、接続方向は補足型、接続方法は接続詞的連語型とすべきだろう。一般に、補足型の接続方法には二つの型が見られ、接続詞・接続詞的連語型には「もっとも」「ただ」「ただし」「なぜなら」が、副詞・副詞的連語型には「もちろん」「もとより」「実際」などがよく使われる。

(17)は「其」による接続だから、同内容型の中の指示語型、(18)の「だから」は順接型、「信用してゐるのなら、已を得ない」は、表現に若干の差異はあるものの、(15)の「信用してゐるなら、蓋し已むを得ざる」を受ける。これは、単位文を含む接続、つまり文反復型の接続である。

(19)は「けれども」が逆接型、「事務を取らせたら……扱の往く者」は(17)の「事務を取らせて扱の往く者」を受ける文反復型。(20)は指示語型。(21)の接続語は「何故」、接続方向は補足型、接続方法は副詞・副詞的連語型の一種である。

(22)は前文の「何故」を受けた同一語の副詞型と「何故と言つて」による補足型の接続詞的連語型の重なつたもの。(16)に「何故と言つて」、(22)に「何故と言つて」があるが、これはたまたま表現が同じになつただけであつて、前の文を受けた接続とは異なる。(22)の「彼奴」は(20)の同語を受けた同一語型。(23)は同内容型の指示語型とみることができる。

「(24)それは課長の方が或は不條理かも知れぬが、しかし苟も長官たる者に向つて抵抗を試みるなぞといふなア、馬鹿の骨頂だ。(25)まつ考へて見給へ、山口は何んだ、属吏ぢやアないか。(26)属吏ならば、假令課長の言付を條理と思つたにしろ思はぬにしろ、ハイハイ言つて其通り処弁して行きやア、職分は盡きているぢやアないか。(27)然るに彼奴のやうに、苟も課長たる者に向つてあんな差因がましい事を……」

「(28)イヤあれは指図ぢやアない、注意サ」

「(29)フム乙う山口を弁護するネ、矢張同病相憐れむのか、アハアハハ」

(24)は指示語の「それ」と同一語型の「不條理」および「馬鹿」によって、(22)、(23)と接続しているとみてよいだろう。(25)の「属吏」は前文の「課長」「長官」と対立関係にある対立語型の接続、「山口」は(22)の「彼奴」を受ける同内容関係にある言い換え型の接続である。(26)は同一語「属吏」による接続。(27)は「然るに」によって前文を、「彼奴」によって(25)の「山口」を受けている。(28)の「イヤ」や(29)の「フム」は打消型の感動詞型とでもすべきであろうか。(28)は指示語型接続、(29)は(27)の「彼奴」を「山口」で受けた言い換え型の接続でもある。

このような会話文を見るかぎりでは、会話文の接続は多重型が少ない程度で、地の文による接続との違いはあまりないといつてもよいが、(28)、(29)に表われた感動詞による打消型のような接続は、やはり会話文らしい受け方といえよう。

〔3〕(30)高い男は中背の男の顔を尻眼にかけて口を鉗むで仕舞ツたので談話がすこし中絶れる。(31)錦町へ曲り込んで二ツ目の横町の角まで参つた時、中背の男は不図立止つて、

「(32)ダガ君の免を食つたのは、弔すべくまた賀すべしだぜ」

「(33)何故。」

「(34)何故と言つて、君、是れからは朝から晩まで情婦の側にへばり付てゐる事が出来らアネ。アハアハアハ。」

「(35)フ、ハ、ン、馬鹿を言給ふな。」

ト高い男は顔に似気なく微笑を含み、さて失敬の挨拶も手軽く、別れて独り小川町の方へ参る。(36)顔の微笑が一かは一かは消え往くにつれ、足取も次第に緩かになつて、終には虫の這ふ様になり、悄然と頭をうな垂れて二三町程も参つた頃、不図立止りて四辺を回顧はし、駭然として二足三足立戻つて、トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸作りの二階家へ這入る。(37)一所に這入つて見よう。

(30)の「高い男」は(14)の同表現を受ける同一語型、「中背の男」は(13)の「中肉中背の……好男子」を受ける同内容型の言い換え型の接続である。これに続く(31)は前文の「中背の男」による同一語接続で、この文を句点文に含めたのは、(14)の場合と同様の理由による。

(32)は「ダガ」「君」「免を食った」による接続。「ダガ」は逆接、「君」は(30)の「高い男」を受けての言い換え型、「免を食った」(=免職になった)は(19)の同一表現を受けた同一語型になる。(33)「何故」と(34)の「何故と言つて」は(21)、(22)のそれと同じ同一語型+補足型の接続である。(34)の「君」は(32)の同表現を受けている。また、(35)「フ、ハ、ン」は「フン」の変化形とみて打消型の感動詞型としておくことにする。「フン」は「イヤ」や「イイエ」とは文法機能が違うので別の型とすべきかもしれないが、型の数がいたずらに多くなるのを避け、「フン」が前文の内容を肯定していない点を重くみて、ここでは感動詞型に含めた。

(35)は同一語型「高い男」もあるから二重接続になる。(36)は前文の「顔」を受けている。(37)は前文の「這入る」を受ける。いずれも同一語型である。

4. 接続型と頻度

前節までに扱った接続方法の中には、説明をもう少し加えておかねばならないものがある。それはゼロ表記による接続であつて、たとえば(35)の「高い男」は、この文の動作主であるばかりでなく、(37)の動作主でもあつて、ゼロ表記の接続である。また、(37)では「我々も高い男と」のごとき語句が省略されているから、これもゼロ表記の接続ということになる。そして、このようなゼロ表記は、文が煩瑣になるのを防ぐため、たいていの文に使われている。このため、いちいちゼロ表記の接続のあることを指摘しなかつたが、頻度数

の最も高いのはゼロ表記接続である。

次に、前節までの用例に表れた接続型と用例番号は下記のとおりである。接続型は、接続方向型の後に<>を付して接続方法を示した。

順接型 <接続詞・接続詞的連語型> ……(18)

逆接型 <同上> ……(2), (10), (15), (19), (27), (32)

補足型 <同上> ……(16), (22), (34)

同上 <副詞・副詞的連語型> ……(21), (33)

比較型 <同上> ……(5), (7)

同上 <名詞・名詞的連語型> ……(13), (14)

指示語型 <代名詞型> ……(2), (5), (20), (23), (24), (27), (28)

同上 <連体詞型> ……(6), (17)

同一語型 <副詞・副詞的連語型> ……(22), (34)

同上 <名詞・名詞的連語型> ……(3), (8), (13), (22), (24), (26), (30)~(32), (35), (36)

同上 <動詞・動詞的連語型> ……(37)

同上 <代名詞型> …… (34)

文反復型 <同一文型> ……(18)

類概念型 <名詞・名詞的連語型> ……(4), (6), (8), (9), (13), (14)

言い換え型 <同上> ……(25), (29), (30), (32)

対立語型 <同上> ……(5), (7), (13), (14), (25)

連想型 <感動詞型> ……(7), (29)

同上 <名詞・名詞的連語型> ……(10), (11), (13)

打消型 <感動詞型> ……(28), (35)

これらの接続型の中で最も頻度数の高いのが同一語型<名詞・名詞的連語型>の11回、次いで指示語型<代名詞型>の7回、逆接型<接続詞・接続詞的連語型>および類概念型<名詞・名詞的連語型>の6回、対立語型<名詞・名詞的連語型>の5回である。同一語型も指示語型も類概念語型も同内容型であり、合わせると頻度は24になる。引用した文章は、逆接型や対立型によって接続方向に変化を与えながらも、同内容型を多用することによって、きわめて安定した流れで展開している、と結論づけることができよう。

(城西大学女子短期大学部講師)